

M E S S A G E

G-COE「新炭素学」ニューズレター 巻頭言



福岡女子大学理事長兼学長
九州大学名誉教授

梶山 千里
Tisato Kajiyama

中国を初めとするアジア諸国の経済成長は、日本にとって、とりわけアジアの玄関口である福岡にとってたいへん好ましいことです。このアジアの経済成長は2003年頃からの石油の価格の上昇要因のひとつとなり、石油の高騰が安価な石炭の活用を喚起しました。一方では不十分な環境設備での石炭の大量使用によってNOx、SOx、煤塵の大量発生を招き、アジアの環境問題は、局地的な問題から国境を越えた問題になり、距離的に近い九州へ大きな影響を与えています。当時、九州大学総長として、石炭の利用拡大と、アジアの環境問題の解決は技術が重要で、環境技術とそれを理解し展開できる人材が数多く必要と考えておりました。九州大学は2004年には小寺山亘理事・副学長を中心に九州大学東アジア環境研究機構を立ち上げ、さらに上海交通大学、北京大学との技術交流を開始しました。九州大学の中にも十分に蓄積されていなかった石炭のクリーンな利用技術の体系化に対して、持田勲特任教授が取り組まれ、この分野の技術と組織の整備を精力的に拡大されました。それが2007年11月の九州大学の炭素資源国際教育センター設立へと繋がりました。このような背景の元に、九州大学の多くの関係者のご努力が、2008年6月にG-COEプログラム「新炭素学」スタートの母体になったと思います。私の九州大学総長の任期は、2008年9月まででしたが、その後もNEDOのゼロエミッション石炭火力発電プロジェクトでのO₂/CO₂石炭ガス化研究の立ち上げを初め、アジアとの技術交流、フォーラムや国際会議など永島英夫教授がG-COEプログラム「新炭素学」を中心に据え、リーダーシップを発揮され、いくつもの目覚ましい活動を展開されて来られました。現在、福岡女子大学の学長として、福岡女子大がこのようなグローバル級の研究と人材育成活動に携われるという比類ない経験ができることを喜ばしく思っております。

G-COEプログラム「新炭素学」は、アジアを包含する大きな枠組みの中で、九州大学と福岡女子大学の人材育成事業、科学技術の研究と啓蒙活動で大きな成果をあげつつ、早くも5年が過ぎ、今年是最終年度となりました。その間に、2011年の東日本大地震により、G-COEプログラム「新炭素学」の重要性はますます高まりました。低炭素社会を見据え、広くアジアの研究者と、炭素資源の枯渇、資源品位の低下、環境汚染、地球温暖化対策等の協業を通じた技術開発と適応が求められております。日本およびアジアの国々の産官学連携の促進を通して、豊かなクリーンアジアの招来への関係者の貢献を期待します。